

目的 昭和50年、53年の2回にわたる幼児の色彩嗜好調査から、性別による嗜好色の相違がみられた。特に赤、青の嗜好色について、明度差並びに彩度差の知覚による色調の好みが見られたので、今回は117色の嗜好調査を試みた。

方法 被験者は4、5歳の園児102名を対象に行い、そのうち男児54名、女児49名であった。調査期間は昭和56年6月、場所は明るく静かな部屋の一隅で行った。調査に際しては、被験児を1名ずつ呼び、灰色紙上には12色の有彩色並びに無彩色を7種（P・It・b・v・dp・dk・d・g・Itg）のトーン分類にしたがって並べた色表を提示し、各色相別による嗜好色を尋ねた。

結果 有彩色の場合、男児では嗜好率の上位がV、dk、dpの順位であり、純色並びに暗い色調を好む傾向がみられた。女児の嗜好率上位はV、P、b、Itの順位であり、純色並びに淡色・明色を好む傾向がみられた。しかし、男女共に、色調の好みは色相によって相違があり、又性別によって異なる傾向がみられた。

無彩色の場合、男児の嗜好順位は白・黒・灰であったが、嗜好率ではWとItGyが約33%、WとdkGyが約25%、mGyが約23%であって、それらの差が少なく、3種共に好まれる様子が見られた。女児の嗜好傾向は白、灰、黒の順位であり、過半数はWとItGyを好み、W又はdkGyの嗜好は非常に少なく、淡色嗜好であった。